

# 保育における振り返りと記述することについて

## —実践に生きる保育者の研修を考える—

川崎 徳子

Personal Reflections and a Study of Writings on Childcare  
—Considerations arising from the practical training of childcare professionals—

KAWASAKI Tokuko

(Received September 25, 2015)

### 1. はじめに

現代のめまぐるしい社会経済の動向を含む環境の変化は、乳幼児期の子どもをとりまく環境にも大きく影響している。国の政策から子ども・子育て関連3法（平成24年8月）により「幼児期の学校教育・保育、地域の子ども・子育て支援を総合的に推進」という流れの中で、乳幼児期の教育、保育の施設の総合的な整備が進められており、それを担う施設自体のあり様も変化しようとしている。そして、平成27年（2015）4月、本格的に「子ども・子育て支援新制度」（以下新制度）<sup>1)</sup>として動き始めた。このような社会の動きの影響を受け、今まさに乳幼児期の子どもの育ちを支える施設である幼稚園、保育所、認定こども園などでは、各々の園が運営の方向も含めた園の保育を見つめ直さざるをえない状況に置かれている。

我が国におけるこうした乳幼児期の子どものための施設は、承知の通り歴史的な流れから現行の制度まで、その多くを幼稚園、保育所という二つの保育施設がその役割を果たしてきた。そこへ平成18年度よりスタートした認定こども園<sup>2)</sup>が幼稚園と保育所の両方の役割を果たす施設として新たに加わり、乳幼児期の子どもの育ちを支える施設は、さらに多様な形で展開されているのである。これらの様々な形態の施設の状況は、さらに乳幼児期の保育を教育という面からみると、義務教育の期間には入らないということもあり、国公立、私立、さらには、認可施設以外の託児的な施設など、その設置の種類はもとより、その保育の実態も利用する保護者のニーズに合わせて多種多様な形で発展し存在しているというのが実情である。

このような状況の今、時代の変化に対応しながら、保育を担う施設の役割やそのあり方、そして、その必要感とともに保育の質をどのように考え、その保育の内容の保障をしていくのか、また、保育者の専門性はどうか、保育の実践の基本についてさらに丁寧に考えていかなくてはならないと感じている。

そこで、本稿では、こうした多種多様な保育現場の中でも、筆者がかかわってきた地方の私立幼稚園における保育者、そして園の研修について、その研修の具体的な取り組みを考えると、現場の多忙な日々の中にもどのようなかたちで研修を位置付け進めていくことが、保育の実践にかえていくのかということなど、園の保育研修をコーディネートしている筆者でもある私自身の実践の振り返りから考えていく。また、この実践の振り返りを通して、保育者の研修が幼稚園における保育の質の向上と保育者の専門性を踏まえた保育者の力量を高めること

へどのように繋がっていくのかということについても考察を加えていく。

## 2. 現在の保育の現場の状況を鑑みる

### 2-1 様々な保育施設と保育の実践との関係について

前述したとおり、保育の現場は、その設置主体の違いから捉えても、その保育実践については、かなり幅広い取り組みが存在すると言える。もちろん、どのような立場の施設であっても現行の幼稚園教育要領<sup>3)</sup>、保育所保育指針<sup>4)</sup>さらに、新制度に伴って新たに示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領<sup>5)</sup>にしたがって、その保育が実施されているということが前提ではあるが、実際には、その幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の理解と保育実践への解釈の方向、また、環境による教育というところから、それぞれの環境の違いや日々の生活への保育内容を踏まえた活かし方の違いなど、限りなく多様になっているのが実情ではないだろうか。加えて、他校種の教員と同じく、もしくはそれ以上に、さまざまな養成課程を経て幼稚園教諭、保育士の立場にある保育者の現状がある。保育者として現場に立つ上で、その保育のあり様や保育者自身の意識の中には、養成課程におけるカリキュラムの違いからはじまり、実習経験の違い、また幼稚園教諭の免許、保育士の資格を両方所持している、一方だけである、あるいは、幼稚園、保育所などいくつかの種類の現場の経験を経ている経ていない、さらに、経験年数に加えて、子育ての後の復職等々、現場に立つ一人一人の保育者が多様な背景をもっており、このことが保育者としてのあり様、あるいは、保育へ影響しないとは言いきれない。また、子育て支援という役割を担うことから、多様な保育のニーズに対応していくために、クラスの担任に加えて、様々な立場や雇用の条件形態で保育に携わる保育者が、同じ実践の場に一緒に居るということも、今の保育現場の実態である。<sup>6)</sup>

このように、さまざまな立場の保育者がそれぞれ役割の違いはあっても、子どもの健やかな成長を支えていくという保育の目標に向かって、よりよい保育を求めていることは変わらない。また、保育の実践では、そうした背景を越えて一人の人として子どもと向き合うことが重要であることは、保育者の姿勢として大切である（川崎 2010）と考える。この保育の基本であると考えられるものを大事にするためにも、現職の保育者の研修の必要性を感じるのである。だからこそ、実践の場における現職の保育者の研修は、保育者自身の必要感とともに、園全体、あるいは、地域の幼児期の保育としても考えなければならないのではないだろうか。

こうした立場が様々である保育者が居るということは、研修に対するイメージや必要感にも保育者による差を生じさせているということについても否めない。このような現状を考慮した上で、各々の園が、園としての保育を考えることや、地域の幼稚園として各地域の保育環境の整備と充実に向けて、各自治体の教育委員会や幼稚園協会、保育協会というような保育を支える教育行政機関や団体組織を基盤に研修体制を整え、研修の機会を整備していることは、保育者の意識はもちろん、各地域の園の発展や保育の質の保証の上でも大切な体制であると思う。

### 2-2 私立幼稚園の現状

実際の全国の幼稚園の置かれている現状を見ながら、私立幼稚園の状況について、保育という視点から眺めてみる。幼稚園数を見ると、最新の平成27年度の5月1日の時点では、幼稚園数は前年度より1,229園減少しているものの、11,676園で、その内訳は、国立49園、公立4,321園、私立7,306園であり、私立幼稚園はその中で幼稚園数の62.7%を占めている。<sup>7)</sup> また、園

児数については、全国の幼稚園在園児数1,401,966人であり、そのうち私立幼稚園の在園児数は、1,158,469人で、82.6%を占める。さらに幼保連携型認定こども園を加えると、園総数1,943園のうち、私立が1,569園で、80.1%、園児数も総園児数が281,090人で、私立の在園児数は、237,170人の84.4%と、その多くを占めており、私立幼稚園の社会での役割の大きさが伺える。したがって、教員数についても、全国の幼稚園の教員数（本務者）は101,498人（男性6,728人、女性94,770人）だが、その中の多くが、私立幼稚園の教員ということになり、幼稚園教育における私立幼稚園の役割の大きさが見えてくる。

また、現在の保育施設全体から私立幼稚園の置かれている状況を考えると、2015年6月5日付けで発表した内閣府の子ども・若者白書(旧青少年白書) 2015年版<sup>8)</sup>では、平成26年度の全国の保育所数は24,425園、幼稚園数は12,905園であり、また、保育所利用児童数227万人に対して、幼稚園在園者数156万人という現状を見ると、園児数の確保や園の運営など、幼稚園の利用の状況も、私立幼稚園の経営に関連する面からの課題も推し量られる。

こうした立場にある私立幼稚園の保育については、もちろん地域の実情の違いはあるだろうが、それぞれ建学の精神とともに私立ならではの歴史と、その創設からその時代の保育者の実践によって積み重ねられ培われてきた園独自の保育の展開もあり、受け継がれてきた保育によって、日々が支えられていることは実践の背景として強いところである。しかし、これらを別の視点からみると、それぞれの園としての発展を大切にしてきたことから、保育や保育者同士の交流を含む研修においては、まだまだ開かれていく可能性を含み、ある面では課題とも捉えられる。そこで、次の項では、Y県の私立幼稚園に保育の実践についてY県私立幼稚園協会を基盤にそれぞれの地域の幼稚園協会と各々の幼稚園が連携・協力した研修体制の中で、Y県全体としての保育の質の向上と保育者の資質の向上に向けて研修に取り組まれている様に触れながら、研修のあり方について考え、保育の実践へのつながりについて思考していきたいと思う。

### 2-3 私立幼稚園の現状と研修のもち方について

平成27年4月現在のY県の私立幼稚園は、全幼稚園数185園(国立1園、公立47園、私立137園)の中で、137園であり、認定こども園も33園のうちS市立の6園以外は、すべて私立の幼稚園がかかわっている<sup>9)</sup>。したがって、私立幼稚園の教員数の割合も多いということになるが、「私立幼稚園の保育者は、経験年数が公立に比べ浅い。中には、3年目の保育者が主任の役割を担わざるを得ない園もある。」(亀ヶ谷、2011)とあるように、若年の保育者が園の保育の実践を支えていたり、預かり保育の拡大により、様々な立場でかかわる補助教員との連携の課題もあつたりなど、保育の質の向上や保育者集団の資質の向上の課題が常に存在しているといえるだろう。これについては、私立幼稚園を支える環境には、全国の私立幼稚園で組織されている全日本私立幼稚園連合会<sup>10)</sup>、及び全日本私立幼稚園教育研究機構があり、その基に、「保育者としての資質向上研修俯瞰図」や「研修ハンドブック」が作成され、私立幼稚園の教諭が意欲的に研修を受けられるような工夫や調査研究、また、「幼児教育実践学会」など、保育実践を支える土壌を有している。(岸井、2011、安家、2008) Y県においても、Y県私立幼稚園協会を基軸にしなが、各地域の幼稚園協会での研修体制が確立され各々の園での園内研修へと繋がられている。

ここで、筆者である私自身の研修へのかかわりについてだが、小学校、幼稚園での実践の経験があるということもあり、これまで公立私立の幼稚園、保育所、小学校教員の研修にかかわる機会を得てきている。その研修は、新任研修や中堅教員研修などに加えて、教育課程の編成

に向けての研修など、園内校内研修から、各自治体、及び、県を越えての地域の研修など、地域的な研修の振興のための全体的な方向性を求められることも増えてきた。そこでの私の役割は、研修全体の持ち方から進め方、具体的には、課題の設定の仕方から保育の実践に活かせる研修のあり方など、各々の園、あるいは、地域の研修体制に求められる課題に対して、それぞれの実情や必要感に応じて研修の方向性や計画などを柔軟に思考し、研修全体のコーディネートや、ある期間の研修内容をデザインしていくことが求められることも多い。

このような研修の中で、近年は、私立幼稚園の研修に携わる機会を多く得てきた。このことは、私立幼稚園としての現実的な課題に連動しての研修の必要性と、社会的な要請との流れに即したものであることに加えて、Y県私立幼稚園協会を中心とした県内の私立幼稚園の保育への意識の肯定的な方向として考えているところである。そこで、私がこれらの研修の機会を引き受け、研修の方向を考えるにあたっては、それぞれの園が多忙であることを考慮しながら、毎日続く保育だからこそ、研修を特別のものにするのではなく、日々の実践を生かしながら、より自然に保育の実践と結びついた研修になるように、そのあり方を思考しているのである。

保育の現場の研修ということを取り上げると、先行研究では、保育の質の向上や保育者の専門性、保育者の資質の向上（秋田他、2007）について、カンファレンスを保育実践に取り入れる方向を示されたところから（森上、1996）、保育の振り返りに「保育カンファレンス」を取り入れた実践やそのあり方（田中他、1996）、あるいは、カンファレンスによる保育者の意識の変容を構造的に検討しているもの（松井、2009）等、保育の中で、語り合うことの意義が示されている。また、「エピソードの記述」（鯨岡、2005）（鯨岡他、2007）を取り入れながら保育カンファレンスを行うことで、保育者が保育を意識化することを実践とのつながりで整理したもの（岡花他、2009a、2009b）や、保育カンファレンスを外部に開くことについて検討したもの（秋田他、2010）（松本他、2012、2014）、保育カンファレンスにおける談話スタイルに視点をおいて保育カンファレンスをデザインするための手掛かりを導くもの（中坪他、2012）や、保育の「省察」について、ドナルド・ショーンが述べる「反省的实践家」<sup>11)</sup>という観点から保育者の専門性としての振り返りについて検討が行われる（金、2009）（柴崎、金、2011）など、保育における記録と振り返り、同僚との語りの場の必要性や重要性については、これらの多くの先行研究からも導かれるところである。

さらに、これらの振り返りと実践との関連については、「幼稚園は体系的な教育を組織的に行う学校教育の最初の学校として位置付けられており、学校評価についても他の学校種と同様の法的位置付けの中で行うことになる。」<sup>12)</sup>と表現されるように、義務教育ではない幼児期においても目標（Plan）—実行（Do）—評価（Check）—改善（Action）というPDCAサイクルに基づいた実践と評価が行われることによって、教育環境を保障し、その実践の継続的向上のために法的にも支える体制が整えられていることも押さえておきたい。

以上のように、様々な保育者の研修に携わる機会は私自身にとっては、幅広く多くの保育者の方々と一緒に学べる機会でもあり、保育を考える私自身が鍛えられる場でもある。

そこで、次の項では、私が研修の取り組みにかかわったある私立幼稚園の研修の展開を通して、そこに現れる保育者の姿を捉えながら、私自身の研修にかかわる実践の振り返りとしても考察していきたいと思う。その際、保育研究者でもある津守真（1926—）の「子ども学」（津守、1897）の思索に触れながら保育の基本を思考し検討していきたい。

### 3. 教育の全ての中心である「子ども理解」にたちかえることから研修の方向を考える

#### 3-1 ある園の園内研修の方法と研究の方向について

Y県内の中東部にあるS幼稚園（以下S園）は、3歳児が2クラス、4歳児5歳児が各1クラスずつの園児数100名程の園である。園の研修の目的は、次年度にある幼稚園教育研修会での2回の発表（8月）に向けて、園の教育課程の再編成を試みたいというものであった。私のかかわった期間は、県の私立幼稚園協会からの相談を受けた20××年8月から発表が終わるまでのおよそ1年間に渡る。

まずは私が園の実情と研修への保育者の思いを伺うことから始め、この期間の研修の目標となる教育研修会への発表をイメージして、私なりに研修のねらいと計画を考えた。まずは、教育の実践は、かかわる子どもを知ることから始まる（川崎 2010）ことを大事にしながら、S園の保育者の一人一人が、日々の実践の中で、一人一人の子どもの姿を意識して捉えようとするところから始めることとする。そして、保育の中で子どもへの近づき方が自分の保育を見つめる視点として積み重ねられ、時々の子どもの表現から子どもの今を捉える過程から次の保育への必要なかわりが見えてくること、また、それが専門性としての保育者の力として感じられることなど、より良い実践につながるよう研修が位置づくことを目指すこととした。

#### 3-2 研修の展開と考察①（保育の基本にたちかえて）

##### 【ステージ1】

○園長との懇談 園の実情と園内研修の実際の確認

- ・これからの園内研修と発表に向けての思いや現在の状況を聴く。

●12月 S幼稚園の保育を参加観察

- ・既存の教育課程と園の保育方針、園の保育の実際について等を聴く。
- ・研修計画と研究の見通しを話す。
- ・教育課程は、園の日々の子どもの記録をもとに、子どもの育ち、発達の姿を捉えながら、ある程度の時間をかけてつくられていくものであることと、つくられて完成するのではなく、その時々で更新されていく必要であることなど、教育課程の基本について、『幼稚園教育要領』『幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開』<sup>15)</sup>の重要な部分を示し紹介する。子どもの記録（保育の記録）の必要性と重要性を確認する。

Y県の私立幼稚園の研修制度として、各地区持ち回りという形で担当の園が県の教育研修会で研究発表する機会が設けられている。S園は、それが割り当てられたこともあり、私が携わることになったのも園としての研究をどのような方向で考え、園内研修として取り組んでいくとよいのかという発表を意識しての研究のスタートからの方向を求められるものであった。それぞれの園の置かれている実情はあると思われるが、私がかかわってきた多くの園の様子からは、日々の生活や指導計画に位置付けられている行事や活動に追われ、さらに、保護者からの要望にもできるだけ応えていけるように、子どもの育ちの成果を形あるものや何かができるなど目に見えるもので示していかなければならないというような雰囲気にも追われていることが感じられる。事前のS園の園長との話し合いの中でも日々の保育への誠実な取り組みとともに気忙しい園の様子を感じられてきた。園の研究や研修の持ち方については、各々園によっても体制の違いがあると思われるので一概に言えるものではないが、多くの園で、園内研修の必要感

は感じていても、どのように園としての研究テーマを持ち、研修のための時間を確保するかなど、日々の忙しさの中での優先順位の問題も見えて、なかなか十分に組みにくい様子が伺える。S園はさらに、次年度からこども園として3歳児以下の子どもたちを受け入れる体制の準備もあり、それに向けて3歳児以下の子どもたちも見通した指導計画や教育課程の編成という新たな課題にも向き合わざるを得ないという切実感も含めて感じられた。

こうした園の研修を考える場合、園の保育の場、子どもの居る場面に私自身が身を置いて、その園の保育を感じ子どもの姿に触れることを通して考えてみることを大事にしている。加えて、子どもの姿が見える場面を写真に収め、写真で切り取った場面から保育を語りながら、園の今の保育の姿を園の保育者と一緒に考えることから始めたいとも思っている。そこで、実際にS園で私が保育参加をし、子どもとのかかわりや心にとどまった場面など、私なりの保育の記録と写真による記録を残した。

### 【ステージ2】

#### ●4月 子ども理解の視点と教育課程についての講話による研修

- ・子ども理解の視点と記録の書き方を確認
- ・事前に、これまでの記録を送ってもらい記述の内容についての課題とこれからの記録（エピソードの記録）の書き方について提案する。

子どもの記録の蓄積から子どもの育ちや見通し、必要な援助やねがいなどが見えてきて、保育の計画や見通しに繋がることを示す。時々の子どもの話を日々の保育後の時間に語り、記録をもとに園内研修として保育を語ることを確認する。（園内研修の位置づけ）

S園では、新年度を迎えて慌ただしい日々の中、8月に発表という時間的な限りがある中で課題でもある教育課程の再編成という目標にむけて、園内研修の時間をつくり、形にしなければならなかった。そこで、限られた園内研修の成果が具体的な日々の実践の中につながり、保育の中で一人一人の保育者が具体的に意識していけるような課題や視点を持つことが必要であると考へた。日々の保育の計画も、設定した活動を主体にしていると、その活動をこなしていくことに追われてしまい、なかなか子どもの遊びの中身や展開に目を向けたり、遊びの中に表現される子どもの思いまで、意識を向けて感じていったりすることへは意識が向きにくいのが実際だろうと思われる。そうしたことは、園内研修の前に事前に見せていただいたこれまでの子どもの記録にも表れていた。例えば6月のある日の年長児設定の保育場面の記録を見てみる。

#### <5歳児の担任の記録より><sup>16)</sup>

6月〇日 どうぶつのいえ

○きりんとぞうの特徴を尋ねた。

- ・背が高い低い。体が大きい細い。大きい小さいの言葉がなかなか出なかった。きりんは首が長い。ぞうは鼻が長い、耳が大きいという発表はあった。

○きりんの家とぞうの家を比べる

- ・「机はあります」「ドアがあります」「いすがあります」「ジュースがあります」  
ねらいにはずれた発表

○「どんなつくえですか？」と質問した。

- ・ぞうの机は大きい、きりんの机は小さいと気付く子がやっといた。

○「ドアはどうか？」

・きりんのは長い、ぞうは短い

…以下略

この記録には、既存の教材を使っでの設定の場面での子どもの姿が記されているが、ここには、保育者が活動の場面でやらなければならないと計画をしていることに対して、子どもはどのように反応したか、あるいは、活動の成果についての子どもの姿や活動ができるようになるには、どうするといいいのかというようなことが記されている。もちろん、これもひとつの子ども理解の一面であるが、それぞれの子どもがこの活動の中で、どんな体験をしているのか、それぞれに表現していることは、その子どもにとってどういう思いや文脈の中での表現なのかというような子どもに寄り添って保育者が感じたり子どもの世界を想像したりしようとしている様子の表現は記されてはいなかった。こうした記録の様子から、私は、「行動を表現としてみる」（津守、1987）、「行為を表現としてみること」（津守、1992）と津守が論じているように、保育の中の子どもを感じ考えるためには、まずは、一人一人の子どもの姿をしっかりと見ること、それは、何をしているかという表面的に見えることだけにとどまるのではなく、子どもの感じている世界、何を体験しているだろうかと子どもの世界に寄り添って見る必要があることを実感してほしい、保育の中で子どもを見るということについて意識してほしいと思った。そこで、私のかかわる最初の園内研修では、教育課程作成へのつながりと保育の記録について再度考えてもらうためにも、S園での保育参加の際の子どもの写真を交えながら、私なりの子どもの世界の捉え方を一緒に見て考えてもらい、保育の中で子どもを見るということはどういうことかなど、保育の基本に立ち返るところから一緒に考える時間をもつことにした。

<園内研修での筆者<<講話>><sup>17)</sup>より>

『教育過程と指導計画～子どもの姿を捉えることから～』

教育課程と保育について、子どもの姿を捉えながら作られていくことなど、幼稚園教育要領から始まり、その作成について基本的なことを抑えながら、私が12月の保育参加をした際の保育の場面のエピソードのいくつかを写真を交えながら、保育の中の子どもの姿をこんな風に見ていくと子どもの体験している世界やそこから子どもの育ち、あるいは、保育者のねがい、必要な援助が見えてくることなどを語る。

〔エピソード〕

年中児が集まって製作をしている場面の様子。子どもたちは、それぞれ自分の黒い台紙の製作ブックに折り紙を使ってみんなで一緒に作ったサンタクロースとツリーを貼っている。その日は、そこへクレパスで好きなものを書いていくという活動。【写真1】の○は、サンタクロースの持つ白い袋の中に、赤いクレヨン一色でプレゼントを書いている側へ私がそっと座る。○は私が側に来たことを特に意識をしたようではない様だったが、ふと、「これはね、ぼくのプレゼントで○○、それから、これは、○○ちゃん

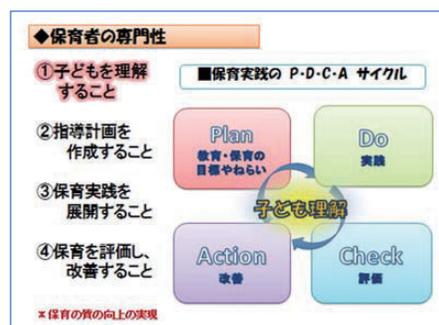


図1 『教育課程と指導計画』筆者作のスライドより



【写真1】

のプレゼントで、こういうのが好きなんだよ…」など、たくさんたくさんプレゼントを描きながら、そのプレゼントについて、思っているいろんなことを一つ一つ私に話すように描いていく。すると、それを見ていたとなりのKは、自分のツリーに飾りを描き始める。そして、私に話すような自分につぶやくような声で、「ぼくのうちには、こういう長靴の形の飾りがあるんだよ、それから、こういういろいろな色のまるいのがあって…」という風に、どんどん飾りを描いていく。それから、ツリーを描き終わると、右隣の女儿がアナと雪の女王とオラフ<sup>18)</sup>を描いているのを見て、K「あ、ぼくがいなかった、ぼくを描こうっと…」と言って、自分を書き始める。【写真3】その隣では、プレゼントを描いていたOが、二人の様子から気がついたように、ツリーのよこに、オラフを描き始める。ちょうどその時、担任の先生が、「手を置いてください…、みんなの前で発表してもらいます…」という投げかけをされる。すると、Oはせっかくオラフを描き出していたが【写真4】、途中で手をとめて話を聞き始める。私が「発表の後でも描きたい人は描いてもいいと言われたから、後で描いたらいいよ」とそっと声をかけると、Oもだまって頷く。それからOたちの発表の番になる。それぞれ先生から紹介され、後で描きたい人は、製作ブックをもっていてもいいといわれたけれども、Oはそのまま提出してしまう。そこで、発表からかえてきたOに私が「まだ描たかったんじゃない？描いてもいいみたいだよ」と声をかけるが、Oは、「もういい」といい、給食の準備をはじめめる。〔筆者の記録より〕



【写真2】



【写真3】



【写真4】

私は、スライドを進めながら、その時の様子や子どもはこんな風に設定の活動の中でも自分の世界を広げていろいろなことを考えながら過ごしていることや、それぞれの作品には、それぞれの思いがあることなど、私なりに一緒過ごす中で感じたことを具体的に話した。たとえばOは、白い袋の中のプレゼントを赤一色で描いているけれども、たくさんたくさんいろいろな人のことやいろいろなプレゼントとその様子をイメージしていて、その世界は豊かで鮮やかであること、隣にいるKは、Oがいろいろなことをイメージしていることを感じて、自分もツリーを描く世界を広げていったことなどを話す。加えて、その側にはそうした子どもの眩きを聴く私がいたという保育者の役割にも触れる。また、子どもは他の子どもの様子をよく見て感じていて、友達の姿を認めたり自分に必要なものを友達から取り入れたりなど、しっかりかかわりがあることなど、描くというこの活動の中にもたくさんの子どもの育ちや心が動く体験があり、それを保育者が側にいて見ようとしていることの大切さなどを伝えた。さらに、こんな風に子どもの世界を感じながら見ていくと、保育がさらに楽しくなり、一人一人の子どもの今が感じられてくることなども話し、たとえば、発表の前のまだ描こうとしていたOへの援助も違ったかもしれないなど、子どもの世界を知ること、保育の計画や援助も見えてくることにも触れ

ていった。そして、全体として活動を進めるためには活動の出来栄としての子どもの様子を見とることもあるが、一人一人がどんな思いで今を過ごしているかなど、体験している世界を感じていくことも大切で、どちらも保育の中の子どもの捉え方として必要なことであることを話した。このエピソードの他にもいくつか写真とともに保育の場面を振り返りながら子どもの世界の感じ方や保育の振り返りを私なりに伝えるとともに、一緒に子どもについて語った。

それから、それぞれ保育者へ、その日やその頃のおもしろいと思った子どもの姿、印象に残っている姿などを語ってもらう。それは、こうした子どもの世界を考え感じながら保育を振り返り、子どもにとっての今日という日と、次の日の保育へという保育者の思いが自然とつながっていくような保育者の省察と保育との関係や、こんな風に子どもの姿を語り合い振り返ることで、子どもを見る保育者のこころもちも変わってくることに、この語り合いの中で体験的に通して感じてほしいと思ったからである。

もう一点、S園の教育課程と指導計画、週案や日案をこの園内研修の前に見せてもらっていた。この園のおおまかな一日のスケジュールは、朝のバスの便での登園の子どもたちが全員そろそろまでは、好きな遊びの時間—朝の集い—設定保育—給食—好きな遊びの時間—（設定保育）帰りの集いという生活である。日案に記されているその日の様子には、日々の生活の流れや活動、または行事のあるときには、その進行などは記されるが、子どもの姿については、気になることや気にかけておかなければならないことというようなことが少し書かれているものであった。そこで、子どもに目を向けて、保育の記録をするためにも、特別に書くのではなく、日案の中に子どもの様子をメモする欄を設けて、その日に気になることだけではなく、まず、保育者がおもしろいと思ったこと、こころに残っている子どもの姿をメモ書きでもいいので、記しておくことが大事だということを伝える。また、初めは設定の時間の様子でもいいけれど、好きな遊びの時間の子どもの姿を見てほしいということも話す。そして、その日の中で、保育者同士が顔を合わせるときに、あるいは、お茶の時間でもいいのでおもしろいと思う子どもの姿や保育者がこころに残っているエピソードなどを語って欲しいということも伝える。

### 3-2 研修の展開と考察②（保育の記録と保育を語ることから）

#### 【ステージ3】

##### ●7月 記録をもとに保育を語る

- ・エピソードの記録から保育を考える、好きな遊びの中の子どもの姿を捉えることから、保育の計画をどのようにつくっていくかについて話す。
- ・各年齢の担任より、エピソードを話しながら、子どもの姿を語る。

\* ストローロケットのエピソードが各年齢から出される。→発表の方向が見える

- ・発表に向けての資料の作成、研修成果のまとめ方の提案
- ・研修成果と発表資料の再構成、修正

まとめた言葉ではなく、ありのままの実感や体験を具体的に表現することを伝える。

< S園のまとめられた発表の資料から、研究の成果を振り返る >

発表資料にも示されているように「日々の活動や行事が多忙でそれに追われていたために、教育課程を意識した保育ができていなかったこと、教育課程に対する教員の理解が十分でないことが課題でした。また、子どもが楽しそう、面白そうにしている場面の保育記録も少なく、

保育記録を工夫することが必要でした。…」【図2】と語られた。S園の保育者は、4月の園内研修で保育の中の子どもの遊びや姿をどんな風に見ていくのかななどを、体験的に感じられたことで、「子どもへの新しい見方をするようになった」【図3】と表現されている。これまでも、子どもと一緒に生活はされてきていて無意識であっても子どもの世界に寄り添って感じて楽しまれていることもあるからこそ、日々の保育が進んでいるのだろうと思う。したがって、子どもに寄り添って見ることは、決して新しい見方ということではないと思う。しかし、これまでの保育者の側からの全体の子どもの様子や活動の様子を見ての気になる点に意識が向いていたまなざしから、一人一人の子どもの側へ気持ちを寄せながら子どもの世界を感じようと意図的に意識する自分の感じを実感されたことについて、素直に新鮮に感じられたのだと思う。そして、その実感を大事にしながら次からの保育へ活かしていこうということを保育者同士が共有し、日々の保育の中で積み重ねられたことは、研修という形で集中的に目標をもって取り組める環境の元での成果でもあるのではないかと思う。

ところが、最初につくられた発表資料は、一般的形式的な表現でまとめられ整理されていたため、それぞれの保育者が実感されたであろう具体的な成果としての内容が見えなくなっていた。そこで、それぞれの保育者が実感したことや自分の中で感じられた新しい感覚、苦労なども含め、ありのままの具体的な思いや感じを表現することが大切であることを確認し、資料に活かすように話す。また、実践例についても〇ちゃんが…という子どもの姿がでてくるのが大切であることを伝える。さらに、取り上げられた実践例は、好きな遊びの中で、子ども同士がつながったり影響しあったりする姿など、その遊びの中に必要な保育内容が含まれているからこそ、保育者が内容を取り出して次の保育に活かしようとしたことなど、子どもの記録を具体的に保育者自身が実感した体験のそのままを表現することが大切であることと伝える。なぜならば、私は、それぞれの保育者が実践例を語る時、その時の子どもの姿を思い浮かべながら、楽しそうに語られている姿を見たからである。こうした日々の子どもの姿のから次の保育の計画がつくられていくことの実感はこの研修の成果であり、記録と省察、保育の関係が感じ取られたその保育者の素直な体験が発表の素材として表現されることこそが大事だと思った。さらに、S園のテーマは、その他の多くの幼稚園にとっても、課題である可能性のあるテーマであり、発表が他の幼稚園の方々にも考える機会として活きるのではないかと考えたのである。

#### 【ステージ4】

- 8月 研修会での研究発表

#### 【S 幼稚園の教育課程における課題】

- ・ 教育課程に対する教員の理解不足  
⇒教員の教育課程に対する理解を高めることの必要性
- ・ 日々の活動や行事をこなすことに追われて、教育課程を意識した保育ができていなかった  
⇒教育課程を意識した保育を再編成することの必要性
- ・ 子どもが楽しそう、面白そうにしている場面の保育記録が少なかった  
⇒保育記録を工夫することの必要性

▽これらのことから・・・

本研究のテーマを設定

#### 図2 S園の発表資料より 課題

#### 【教員研修の実施とそれによる変化】

★研修1  
子どもの好きな遊びの中に本当の子どもの姿がみえてくる  
→子どもの気になるところだけではなく、子どもが楽しそう、面白そうにしている場面の保育記録の重要性について学び直し

・ 最初は、子どもに対する新しい見方をすることが困難だった  
→子どもが楽しそう、面白そうにしている場面を記録することの難しさ  
→教員間で困難を共有  
・ 次に、子どもが楽しそう、面白そうにしている姿を撮ることができるようになる  
→保育記録としても記録できるようになった  
・ 新しい視点からの保育記録について教員間で情報共有  
→年長・年中によるストローロケットの実践例が話題に

★研修②  
・ 子どもに対する新たな視点からの保育記録の振り返り

ストローロケットの実践例

#### 図3 S園の発表資料より 研修による変化

- ・研修を通しての保育者の学びの実感とこれからの保育に向けての保育者の自信へ  
研修の一つの目標としての研究発表を終えたことで、保育者としても保育への自信と研修を重ねたからこそその実感を語るができる。こうした機会を重ねることも次への保育へ開かれていくことを私自身が先生方の語られる姿から感じられる。
- ・教育課程の再編成に向けて、今後も日々の子どもの姿を記録していくことへ

< S園 5歳児 実践事例の発表資料からの引用 ><sup>19)</sup>

担任が造形の研修会で作った「ストローロケット」を子どもたちに飛ばして見せたところ、「遊びたい！」と興味を示しました。翌日、年長組のM君が「今日も、昨日のストローロケットで遊びたい」と言いに来ました。そこで、担任から自分で作ることを提案し、材料の折り紙とストローを準備して、作り方を教えました。そうすると、M君をはじめ、周りの数人の男の子たちが集まって、さっそく自分のストローロケットを作り始めました。出来上がった子からストローロケットを自由に飛ばして遊びます。その中にいたK君が「先生、羽をつけてもいい？」と言いだし、自分で折り紙の羽をつけてストローロケットに改良を加えました。K君は満足そうにしていました。そのK君を見て、周りの子どもたちもストローロケットの改良をし始めました。そのうちに、今度はY君が「ブロックでどこまで飛んだか測ろう！」を言い出しました。そして、(略)ブロックを一列に並べ、ストローロケットが落ちたところまでのブロックの数を数えて距離を測り始めました。他の子どもたちもY君に続いて、ストローロケットを飛ばしてはブロックで距離を測って遊び始めました。その後、しばらくみんなでストローロケットを飛ばすことや飛行距離の測定をして楽しんでいましたが、Mちゃんのストローロケットが良く飛ぶという話になり、みんなでMちゃんのストローロケットを見せてもらいました。担任が「何が違うのかなあ？」と子どもたちに聞かけると、Y君が「細いほうがいいのか？」「折り紙がきれいに折れてるね」と一生懸命に観察していました。しかし、どうしたらストローロケットが良く飛ぶのかという疑問は解決するまでには至りませんでした。…略…

この日の保育終了後、教員間でストローロケットの話をしたところ、年中クラスでもストローロケットを飛ばして遊んだとのことで、やはり「どんなストローロケットがよく飛ぶのか？」という疑問が出ていたようです。また、年中組では日頃、積極的に自分からは遊びに参加しない子どもが楽しそうに遊ぶ姿が見られた話題もあり、「他のお友だちがストローロケットで遊ぶ姿を見てストローロケットに興味を持ち、自分からやってみようと思う気持ちが持てたのではないか」と年中組担任はうれしく思ったとのことでした。さて、教師の間でも「どうしたらよく飛ぶのだろうか？」という話で盛り上がり、作り方だけでなく、飛ばし方にもコツがあるのではないだろうかとの話になりました。年長組担任である私は、どのように飛ばすとよく飛ぶのかを自分なりに考えるとともに、次の日もストローロケットで遊び、子どもたちに息の吹き方にも気付いてほしいと思いました。私は、飛ばし方にも目を向けてほしいと思い「どうやったらよく飛ぶか、考えながら飛ばしてみよう」と声をかけました。それから、もう一度、一斉に飛ばしてみ、特によく飛んだ子どもたちに「どうやって吹いたの？」と尋ねてみました。「力を入れて吹いた」「おなかをへこませて吹いた」「ほっぺをふくらませて吹いた」などの声があがりました。それを聞いてそれらの声を参考にして、みんなでもう一度チャレンジしました。特に、R君は、一生懸命におなかをへこませて吹いていましたが、結果的になかなか遠くまで飛びませんでした。しかし、R君は日頃から集中して何かをすることがなかったのですが、このストローロケットにはお友だちの声に耳を傾け、何度もチャレンジする姿がみられました。担任からもR君に頑張っていることを声掛けしました。私は、ストローロケットを飛ばすことを楽しんでほしいと思っていたので、K君の「はねをつけたい」という自由な発想を面白いと思い、感心しました。また、K君の一言で、他の子どもたちも、「自分だけのかっこいいストローロケットを作りたい！」という思いが芽生え、作ることも楽しむことができたのではないかと思います。そして、Y君の発案によってブロックの数で飛行距離を計ることで、今度は「遠くに飛ばしたい！」という思いに変化し、

子どもたちがそれぞれにストローロケットを考えながら作っている姿が認められました。さらに、Mちゃんのストローロケットをみんなで観察することで「どうやったらストローロケットが良く飛ぶのか」という疑問をもち、お友だちのストローロケットの良い面を見つけることもできました。そして、普段はあまり集中して取り組むことが少ないR君も一生懸命集中してストローロケットで遊び、お友だちの意見を参考にして飛ばしていました。作ることに夢中な子、飛ばし方にこだわる子、そして、みんなが飛ばしているのを見て楽しんでいる子など、遊びを楽しむ視点はそれぞれですが、子ども一人ひとりの学びの姿を感じました。具体的には、子どもの創造性や独創性、自ら遊びを展開していく力や観察力、集中力、他のお友だちの良い面を見つけ、それを参考にする力が挙げられます。子どもたちひとり一人を見ながら、子どもがより満足感を得られるような保育や援助を考えられるように、これからも頑張っていきたいと思いました。 …その他、4歳児、3歳児の記録が続く… (略)

この一連の実践例の記録の語りには、保育の場面での子どもの姿と保育者の思いが生き生きと描かれ様子が伝わってくる。その中には、子ども同士が遊びを通してつながっていることや影響しあっている姿などが見えてくるとともに、個々の子どもの言動を気かけ、表面的な捉えだけでなく、子どもの思いや気持ちにも触れながら保育者が見つめていることなども読み取れる。研究を始める前に書かれていた記録のような子どもの気になる姿や気をつけたいことではなく、子どもの世界を感じ保育者も一緒に味わいながら生活をしている様子が受け取れる。私は、ここに描かれたような子どもが楽しそうにしている姿は、子どもにとっては、自ら能動的に環境にかかわって過ごしている姿でもあると考えている。津守は「子どもが何ものかを実現しようという意志をもったときに、それが実現できるように助けるところに、保育者の重要なはたらきがあると思う」(津守、1987)と述べている。保育者は、そうした生き生きとした子どもの今に気づくと、それをなんとか活かしていきたいという保育者のねがいが生まれてきて、それを実現させられるように環境を整えたり援助の方向を考えたりするようになるのだと思う。その省察と実践へのつながりの思考の流れこそ、保育者が鍛えてかなければならない専門性としての力であり、日々の保育の積み重ねを通して磨かれなければならないものの一つではないかと思う。この実践例のように、子どもと保育者とが紡ぎだす保育の流れは、設定の活動でなくても、保育者が好きな遊びの中の子どもの思いを大事にしながら支えていくと、遊びは展開していくのだということをS園のそれぞれの保育者なりに実感されたのではないかと思う。また、保育者が、子どもの姿を語ることを通して、各々の保育者自身が子どもへのまなざしの変容に気付かれる姿も見られる。保育者がおもしろいと思い、心に残っている子ども姿が

**【年少組：ストローロケットの改良】**

- ロケットに改良を加えてうれしそうに飛ばすY君
- 自分でロケットを作る
- 担任がY君のロケットの上に飛ばす
- Y君「あ！ロケットだ！ロケットは火があるんだよ！」
- ロケットにシャインテープをつけて改良
- 自分が手を加えたロケットを吹いて飛ばし、うれしそう
- ⇒子どもの創造性・独創性



- ストローロケットをコレクションするSちゃん
- お道具箱の中に3,4本のストローロケットを入れて
- ストローロケットをコレクションして持ち、満足そう
- ⇒Sちゃんの心情が伝わってきた



**【年少組まとめⅠ】**

- ・年少組におけるストローロケットの難しさとその援助
- 「吸う」ことは上手⇔「吹く」ことは難しい
- ストローの扱いはまだ考えられない
- ⇒自分で何度も吹いて飛ばしながら、少しずつ上手になっていくと感じた
- ・ストローロケットを少しでも吹いて飛ばせる喜びを感じさせる援助をしたい
- ・自らストローロケットの材料に触れ、遊んでみようという興味を持つ姿は認められた
- ・ストローを使った他の遊びも子どもと一緒に考え、発展させていきたい

- 『自分のものを持つ』認識とその喜び
- 嬉しそうにストローを持ってきてお名前シールを貼ってもらう姿
- お名前シールを貼った後にニコニコしながら戻っていく姿
- 遊ぶだけでなく、「自分のものを持って」という認識もストローロケットの魅力の1つ

図4 S園の発表資料 年少児の記録より(抜粋)

あると、保育後に保育者同士で語ることもよりも楽しくなる。保育者がおもしろいと思うと保育者も能動的になっている。そうした保育者同士が子どもの姿や遊びを語ることによって、保育を共有し、その過程でそれぞれの保育者の中での省察とともに子どもの姿へのねがいが湧きあがってくる。そこで保育者は、各年齢の遊びの中での子どもの思いに添いながらそれぞれの年齢に合わせた次の活動につながるように環境整備やかかわり、援助の見通しが持つようになり、さらにそうした実践に子どものたちの思いが重なって発展していくという子どもとともに作りだす生活や保育の広がりを実感されたのではないかと思う。

この実践例のストロートケットの遊びは、年長児から始まって、年中児、年少児のそれぞれの保育者が、好きな遊びの中で子ども同士がつながり、設定した場面だけでなく、遊びを通して異年齢のかかわりができること、また、直接遊ぶということではなく、お互いが影響しあっていることや、保育者がそれに気付いて活かしていくことで遊びもかかわりも展開していくことなど、保育の広がりを園の保育者みんなで感じて発展させられている。そして、それは、異年齢のかかわりということだけでなく、自分の担任しているクラスの子どものへ援助や環境構成の方向を考えることに活かされるということも、また、実践の中に見えている。これらのことは、これまでの外から形として保障できる活動を用意した設定の場面での異年齢のかかわりや遊びではなくても、子どもの思いを活かしながら進む遊びや生活の中に、子どもが自ら環境にかかわりながら能動的に育って行く姿やその可能性があるということを保育者なりに実感として捉えることにつながったのではないかと思う。

#### 4. おわりに（まとめと課題を含めて）

S園の保育者にとっては、研究発表が一つの区切りではあるが、教育課程の再編成という課題のためには、今回のことを活かしながら子どもの姿の記録を積み重ねていかねなければならない。そして、これらを土台にしなが、園の保育の見直しと教育課程の再編成という次のステップへ進んでいかなければならないだろう。設定の保育での活動や行事をこなしていくことに育ちの成果を求めるだけでなく、子どもの姿や遊びを見つめていくことで、同じように、子どもの思いを活かしながら生活や遊びを子どもと一緒に展開していくような保育をするためには、これまでの指導計画にある活動や行事などを精選していく必要があるだろう。そのためには、多くの研修の時間と労力を必要とする。そして、この園が位置づけている自由な遊びの時間の子どもの遊びの中で、保育内容で求めく子どもの育ちを保障していける可能性を実際の実践の中で実現していこうとするならば、この研修期間に意識的に子どもの姿を見ながら保育を考えたように、日々の子どもの姿を記録しながら、また、保育者同士が語りながら、明日の保育を考えていくという方法が恒常的に続けられることが大切である。そしてそれを日常にしていくためには、活動や行事の精選とともに、継続的に進めるための保育者の覚悟と思い切りが必要になるかもしれない。

しかしながら、実際には、その多くの幼稚園では、多忙な日々の中において、こうした園内研修に身を入れて集中的に取り組むことは、体制的にも時間的にも厳しいことが現実なのではないかと思う。故に、この度のS園の研究発表も含め、研修全体をコーディネートしていくことに私がかかわったような研修をサポートする役割は、必要なかもしれないとも思う。また、S園の取り組みでも発表までの研修の期間に課題意識を持つことで、子どもの見方や保育を計画する力など、保育者の専門性としての保育の力が鍛えられている。さらに、研修を通して実

践を振り返りまとめることは、保育の省察であり、発表という目標に向かっての一連の取り組みは、達成感や満足感とともに保育者としての自信にもつながったのではないだろうか。保育者が日々の保育だけに追われるのではなく、自らの保育の姿を客観的にみつめたり認められたりする機会も大切である。こうした意味においても、研修のあり方を考えるあたり、園の研修の成果を開いて表現する機会があり、それを研修の中で活かしていけるように位置づけることも保育の質の向上や保育者の成長を支える一つとして大事に考えてもよいのではないかと思う。

はじめにも触れたが、幼児期の子どもの保育の環境において、私立幼稚園が担っている役割は大きい。しかしながら、同じように幼児期の子どもの保育を引き受けているといいながらも、様々な幼稚園があり、様々な保育の実践があるのも現実である。加えて現在の保育施設が置かれている状況では、様々な役割や多様なニーズにも応じながら運営していかなければならず、さらにその忙しさを増しているのではないかとも思う。こうした状況では、保育の基本として大切であると考えられる子どもの世界に近づくということにおいても、保育者は予定している活動をこなさなければならないという思いが優先し、とりあえず、予定通りのことが子どもに実現されているかどうかというような研修前のS園の保育者のように子どもへも無意識に監視する目や評価する目で近づいてしまうという状況になりがちである。そうしたときには、子どもの世界を感じることは難しいのではないかと思う。しかし、S園の保育者は、研究発表をしなければならないという目標と研修の機会を活かしながら、園の保育と自らの保育を見つめ直すことに真摯に取り組まれた。だからこそ、この研修にかかわることになった私は、こういう時だからこそ、保育の基本に立ち返り、子どもの世界に近づいて子どもとともに作り出す保育の世界を感じることに気付いてほしいと思ったのである。何より、私自身もS園の保育者の方々と一緒に子どもの世界を感じながら、また、保育者の今に寄り添いながら、自分にとっても実践であると考え取り組んだように思う。

様々な環境の各々の幼稚園において、どのような教育課程や指導計画を作成し、どんな風に保育を展開しながら子どもの育ちを支えていくのか、ねらいを達成していくのか、それは、園、そして、保育者の保育の実践にまかされている。子どもを理解する、子どもの様子を記録する、あるいは、保育を語ると言葉で表現することは、どの園でも行われているだろうが、同じ表現であっても、どんな風に子どもを理解して、子どもの姿の何を記録して、何を語り合うかということの違いによって、その実践における内容も生活も違ってくるのではないだろうか。

津守は保育場面について「幼児教育における、あるいは、保育場面における、保育者のかかわり方は、保育者が子どもの外にたっていて子どもを対象としてかかわろうとするものではない。保育者自身、子どもと同じ地面に立って、相互にかかわりあい、子どもが変化するとともに、自分も変化していく。子どもはもはや、保育者にとって知的に知る対象ではなく、共に身体を動かし相互に言葉をお互い、感情を交流し、共に信頼しあい、共に生活をつくりあげてゆく相手である。」(津守、1987)と表現する。保育の日々は、流れの中に進んでいくので、子どももその中にいることで十分に楽しんでいるだろう。しかし、一人一人のその姿に保育者がどれほど意識を向けながら寄り添い、生活の中に現れる育ちの可能性や、必要な時を感じ丁寧に向き合って過ごしていけるかということは、保育者の姿勢にゆだねられている。だからこそ子どもの世界を感じようと近づく保育者のこころもちは、子どもと保育者がともに生活する保育という場での大事な保育者の専門的視点であると考えられる。それゆえ、より多くの保育の実践の場でこうした保育のおもしろさを感じられるところから始める保育者のこころもちが生きるような研修のあり方の可能性についても、今後の課題として引き続き考えていきたいと思う。

## 謝辞

本稿を思考するにあたり、私立幼稚園の研修に携わる機会を与えてくださいました山口県私立幼稚園協会、事務局の中山雅文先生、実際に園の研修にかかわらせていただきました聖光幼稚園の園長先生をはじめ、一緒に保育を語る機会を下さいました各担任の先生方皆様に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 「子ども・子育て支援新制度」とは、平成24年8月に成立した「子ども・子育て支援法」、「認定こども園法の一部改正」、「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」の子ども・子育て関連3法に基づく制度（以下「新制度」）。平成27年4月に本格施行。内閣府・文部科学省・厚生労働省文部科学省
- 2) 就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律 平成18年6月15日 法律第77号 文部科学省
- 3) 幼稚園教育要領 平成20年3月28日 文部科学省告示第26号
- 4) 保育所保育指針 平成20年3月28日 厚生労働省告示第141号
- 5) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 平成26年4月30日 内閣府・文部科学省・厚生労働省告示第1号
- 6) 筆者がかかわっている国公立、私立幼稚園、保育所等の現状や各年の文部科学省「学校基本調査」、厚生労働省「保育所関連状況取りまとめ」等からの見解を示した。
- 7) 平成27年度学校基本調査 平成27年5月1日 速報値の公表（27年8月6日）  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2015/08/18/1360722\\_01\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2015/08/18/1360722_01_1_1.pdf) 2015/9/12確認
- 8) 子ども・若者白書(旧青少年白書) 2015年版 2015年6月5日 内閣府  
図表13 幼稚園の在園者数と保育所の利用児童数参照  
[http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27gaiyou/pdf/b1\\_03\\_01.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27gaiyou/pdf/b1_03_01.pdf) 2015/9/12確認
- 9) 山口県内の幼稚園・認定こども園 一覧 2015. 4. 1 山口県こども未来課  
<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a13300/kodomoen/ichiran.html> 2015/9/12確認
- 10) 全日本私立幼稚園連合会（全日私幼連）昭和59年4月23日に設立、全国47都道府県の私立幼稚園団体によって構成されており、現在、加盟している私立幼稚園数は、約8,000園。都道府県私立幼稚園団体相互の提携協力し、幼児教育の振興を図るために、調査研究、教員の資質向上のための研修の活動等を行っている。<https://youchien.com/> 2015/9/12確認
- 11) D. A. Schon 柳沢昌一・三輪建二訳 2007 『省察的実践家とは何か プロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房 が引用されているが、筆者の考察も含める。
- 12) 鯨岡峻・鯨岡和子 2007 『保育者のためのエピソード記述入門』 ミネルヴァ書房
- 13) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・落合さゆり・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春「『エピソード記述』による保育実践の省察：保育の質を高めるための実践記録と保育カンファレンスの検討」広島大学学部・附属学校共同研究機構紀要 第37号 2009
- 14) 幼稚園における学校評価ガイドライン 平成23年11月15日改訂 文部科学省
- 15) 『幼稚園教育要領』と『幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開

平成25年7月改訂 文部科学省 の中から子ども理解と保育の計画との関連を基本的に見直し理解しやすいと思われる箇所と抜刷、資料として示す。

- 16) 各クラスの担任から、園内研修の前に、子どもの記録の一部を見せてもらう。引用しているのは、5歳児の担任の手書きの記録を筆者が書きなおしたものの一部である。
- 17) 園内研修のために筆者が作成したスライド資料からの引用。保育者の専門性として、PDCAサイクルとともに、常に子ども理解があることを示している。
- 18) この時期に子どもたちに人気のあった映画のキャラクターの名前。この場面での子どもたちと私との会話には、主役のアナと雪だるまのオラフがでてくる。『アナと雪の女王（原題 Frozen）』2013 アメリカ ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ
- 19) ストロートケットの実践例の部分は、S園の5歳児の担任の研究発表での語りの部分の記録である。実際には、スライドで写真とともにまとめられたものを示しながら語られたが、ここでは、保育の記録として引用させていただいた。また、ここでは、5歳児の記録の部分だけを抜粋しているが、実際には、4歳児、3歳児の記録も一連の活動としてつながっている。紙面の都合もあり、全部を充分に取り上げて考察はできなかったが、貴重な資料でもあるので別の機会の課題としていきたい。

## 引用・参考文献

- 秋田喜代美・箕輪潤子・高橋綾子 保育の質研究の展望と課題 2007『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻 p289-305
- 安家修一 2011 2. 保育フォーラム「保育者としての育ちや、資質向上を考える 『保育学研究』第49号第3号 p89-93
- 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春 2009a「エピソード記述」における保育実践の省察—保育の質を高めるための保育実践記録と保育カンファレンスの検討—『広島大学 学部・附属共同研究機構研究紀要』第37号 p229-237
- 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・林よし恵・松本信吾・上松由美子・落合さゆり・武内裕明・山元隆春 2009b「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスに関する研究『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第38号 p130-136
- 亀ヶ谷忠弘 2011 2. 保育フォーラム「私立幼稚園の“教育の自由性”と“保育者の質の高さ”を永続していくために幼児教育実践学会に込められた思い」『保育学研究』第49巻第3号 p.94
- 岸井慶子 2011 2. 保育フォーラム「保育者の資質向上のあり方」『保育学研究』第49号第3号 p.81
- 鯨岡俊 2005 『エピソード記述入門』東京大学出版会
- 鯨岡俊・鯨岡和子 2007 『保育のためのエピソード記述』ミネルヴァ書房
- 柴崎正行・金玖志 2011 日本における新人保育者の育成に関する最近の動向 『大妻女子大学家政政系研究紀要』第47号 p39-46
- 田中美保子・榊田正子・吉岡晶子・伊集院理子・上坂元絵里・高橋陽子・尾形節子・田中都慈子 1996 保育カンファレンスの検討—第1部 現場の立場から考える— 『保育学研究』第34号第1号 p29-34
- 津守 真 1987 子ども学のはじまり フレーベル館

- 津守 真 1992 子どもの世界をどう見るか 行為とその意味 日本放送出版協会
- 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫 2012 保育カンファレンスにおける談話スタイルとその規定要因 『保育学研究』第50巻第1号 p29-40
- 松井剛太 2009 保育カンファレンスにおける保育実践の再構成—チェンジエージェントの役割と保育カンファレンスの構造— 『保育学研究』第47号第1号 p12-21
- 松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・林よし恵・日切慶子・(研究協力者) 中西さやか・堺愛一郎・刘原婧璇 2012保育カンファレンスの外部公開は他園からの参加者に何をもたらすのか(今日的な教育課題) 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第41号 p133-140
- 松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・金岡美幸・久原有貴・堀奈美・小鴨治鈴・開口道彦・正田るり子・田中恵子・玉木美和(研究協力者) 堺愛一郎・保木井啓史・濱名潔 2014 保育カンファレンスの外部公開は他園に何を発信しうるか: 附属幼稚園を中核として地域の研修ネットワーク構築の可能性の検討 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第42号 p183-190
- 金玖志 2009 新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方—保育実践誤の「保育者間の話し合い(対話)」の中から— 『保育学研究』第47号第1号 p66-78
- 森上史朗 1996 カンファレンスによって保育を開く 《特集 保育を開くためのカンファレンス》 『発達』68 p1-4